

日本細菌学会 関東支部ニュース

第7号

第59回日本細菌学会関東支部総会を開催するにあたって

総会長 黒坂 公生



評議員会の御推薦により、本年の春の関東支部総会を私がお世話させていただくことになりました。期日は6月4日土曜日、会場は西新橋にある慈恵医大中央講堂に致しました。

このところ春の総会は一般演題を募集せず、シンポジウムを主体にした形のものが行われております。今回もこの慣例に従い、特別講演と2つのシンポジウムを計画致しました。そして私自身が現在臨床検査にたずさわっている関係から、次のような主題を選ばせていただきました。

午前中は10時から12時30分まで、予防衛生研究所の坂崎利一先生に司会をお願いして、「腸管病原菌：近年の展望」という主題のもとに、

- 1) Campylobacter (伊藤 武：都立衛研)
- 2) Yersinia (丸山 務：都立衛研)
- 3) 腸管出血性大腸菌(竹田美文：東大医科研)
- 4) 臨床の見地から

(村田美紗子：都衛生局公衆衛生) という演題で()内の4人の先生にお話ししていただく予定になっております。また2人の先生に

- 1) 下痢原性大腸炎 (田村和満：予研)
 - 2) Aeromonas (沖津忠行：神奈川衛研)
- という演題で追加発言をしていただくことになっております。

午後は1時30分から50分間、東大農学部畜産獣医学科の光岡知足先生に「腸内常在菌の功罪」という題で特別講演をしていただく予定です。司会は慈恵医大名誉教授近藤勇先生をお願い致しました。

その後午後2時30分から5時まで東京女子医科大学学長の吉岡守正先生に司会をお願いして、「油断のならない呼吸器病原菌」という主題のもとに5人の先生にシンポジストになっていた、次のような演題でお話しをしていただくことになっております。

- 1) レジオネラ(藪内英子：岐阜大.医.微生物)
- 2) 肺炎マイコプラズマ (小林宏行：杏林大.医.1内)
- 3) いわゆる“非定型抗酸菌” (戸井田一郎：結核予防会.結研)
- 4) オウム病クラミジア (徐慶一郎：デンカ生研)
- 5) 老年者の肺炎起炎菌 (島田 馨：東大.医科研)

総会終了後、大学2号館10階の中ホールにてささやかですが参加費不要の懇親会を計画しております。会場でご質問できなかった点や、充分理解できなかった点などこの場を利用してディスカッションしていただければ幸いです。

できるだけ大勢の方に御出席いただけるよう開催日を土曜日にいたしました。設備の面では充分とは申せませんが、会場を慈恵医大の中の講堂と致しましたので、参加費を2,000円にすることができました。多数の方の御参加をお願い

致します。

なお本総会のご案内は、日本細菌学雑誌の43巻1号に抄録集の予約案内も含めて掲載されております。ご覧下さるようお願い申し上げます。

光岡知足先生の日本学士院賞受賞を祝して



日本細菌学会現理事で、関東支部評議員も務められている光岡知足先生（東京大学農学部教授 / 理化学研究所主任研究員）が、この度「腸内菌叢の系統的

研究」の御業績によって名誉ある学士院賞を授与されました。支部は無論のこと、日本細菌学会としても、細菌学の分野で受賞者を出した前例は、少なくともこの数十年まったく耳にしたことがなく、それだけにこの度の先生の受賞は誠に大きな意義があり、ご同慶にたえません。

光岡先生のご研究は、一貫してヒトや動物の腸内菌叢にかかわっておりますが、従来技術的に困難視されたこの分野にあって独自の方法論を駆使し、多方面に大きく展開されました。その数々の優れた研究成果については、改めて紹介するまでもないと存じます。先生は、まず腸内菌叢の分離・培養・検索のための新しい手法を幾つも開発されました。とくにご自身の創案になる「プレートインボトル法」や各種嫌気性菌用培地は、腸内菌叢解析の標準的方法として国内外で広く用いられているのは、ご承知の通りです。これらの分離培養法を駆使することに

より、腸内乳酸菌および腸内嫌気性菌を多数分離し、DNA 相同性などの分子生物学的手法を用いて分類学的研究を行い、新菌種を次々に発見・命名・記載されるとともに、それまで混乱していたこれらの細菌の分類体系を確立されました。

さらに、この確立された研究手法を用いて腸内菌叢の詳細な生態学的解析を精力的に行い、集積された膨大なデータから腸内菌叢の本態に関する数多くの生態学的法則を発見し、それに基づいて「腸内菌叢と宿主の関係」についての仮説を提唱されました。それとともに、一部の仮説を実験的に証明し、「腸内細菌学」ともよぶべき新しい国際的学問分野を開拓・発展させたのであります。

このような数々の御業績は、まさに未来の細菌学への期待と夢を大きくふくらませる輝しい金字塔であり、今回の先生の受賞はわけても細菌学を志す若い研究者にとってこの上ない励みとなることでしょう。

光岡先生は、かくも忙しい研究の傍ら、教育、学会、行政の面でも熱心に活動されてこられました。私共の日本細菌学会関東支部に限っていても、長年に亘って評議員を務められ、昭和60年6月には第53回支部総会を主宰されました。先生の益々のご活躍とご健康を心からお祈り申し上げます次第です。

(63. 3. 24. 文責：山口英世)

第58回日本細菌学会関東支部総会を開催して

総会長 緒方幸雄

第58回支部総会は、昭和62年10月15日(木)、16日(金)の両日、野口英世記念会館に於いて開催されました。あいにく学会両日とも雨に見舞われましたが、約200名余の会員の参加を得て盛會に催すことが出来ました。今回は、特別

講演2題と一般演題25題とし、1題あたりの講演、討論時間に多少余裕をもたせることに致しました。

第1日めは、東京都立衛生研究所々長の大橋誠博士による「東南アジアにおける腸管系感染

症の現況」を特別講演して頂きました。博士は腸管系感染症について広範囲のご研究を一貫して今日まで続けておられ、その中から上記表題を取り上げて頂きました。海外旅行者、輸入食品の増加など、社会の国際化傾向にともなって海外からの感染症を持ち込む危険性が增大している昨今、この種の感染症対策は世界的規模で考える時代であります。その基礎となるのは世界各地における感染症の発生状況の把握であり、アジア各国における自然環境の差や社会的背景を反映した最新情報をご紹介して頂きました。この事業の実践においては各国の検査レベル、情報価値についての意識の向上はさることながら、国境を越えての情報収集という点で、大変なご努力であったことを痛感すると共に心より敬意を表しました。

第2日めは、財団法人 実験動物中央研究所長の野村達次博士による「実験動物の過去、現在、未来：特にモデル動物の開発に焦点をあわせて」を、北里大学の合田朗博士を座長に特

別講演して頂きました。動物実験が科学的評価に耐えうる客観性を持つためには、実験動物そのものの科学的品質管理が大切なことをはじめ、実験動物の今後の方向としてバイオテクノロジー（特に発酵工学）の導入によるモデル動物の開発に至るまでを、16mm映画を交えて実に明解にご講演して下さいました。日常動物を手に行っている会員にとって、大変興味深いご講演であったことは言うまでもありませんでした。

一般演題は、1題の演題変更が学会当日であったほかには、座長の先生方の御尽力により活発な討議のもと円滑に進められました。

懇親会は第1日め終了後、「ガーナ」にて約90名余の会員の参加によりおおいに盛り上がりました。

最後に、本学会開催に当たり種々御援助頂いた木村貞夫支部会長はじめ支部役員の方々に感謝致すと共に、会員及び協賛各位の御協力により無事任を果たすことができましたことを、心より御礼申し上げます。

歯周病細菌の研究の現状

一般に歯槽膿漏とよばれる歯周病は、歯肉、歯根膜、歯槽骨などの歯を支持する組織の炎症をともなった疾患である。歯周病は歯肉炎と歯周炎に大別される。歯肉炎は、炎症が歯肉に局限した疾患である。歯周炎は歯槽骨の吸収を特徴とした疾患であり、この病気が進行すると、歯周ポケットから膿が出たり、歯が動揺しはじめ、ついには歯が脱落してしまう。

厚生省が6年ごとに行う「歯科疾患実態調査」によると、1人平均喪失歯数は、25歳で1.0本、40歳で2.7本、50歳で7.0本と急速に増え、60歳で15.5本と歯全体の半数を越えてしまう。このような成人における歯牙喪失は、ほとんどが歯周病によるものと考えられる。自分の歯で食生活を行うことは、健康な生活をおくるために欠かすことはできない。これから高齢化社会を向えるにあたり、この病気は社会的な問題となりつつある。

これまで多くの研究者が、歯周病の原因菌を分離しようと試みてきたが、最近までなかなか

古賀 敏比古（予研・歯科衛生）

成功しなかった。その理由の1つは、口腔内の菌叢がきわめて複雑なことである。狭い口腔内でも、唾液、歯面、舌面、頬粘膜、歯肉溝などにおける菌叢はかなり異なる。同じ歯面でも、歯肉縁上ではグラム陽性球菌が多いが、歯肉縁下ではグラム陰性桿菌が優勢である。口腔内の菌叢は、口腔清掃や食生活などの外的要因によっても大きく左右される。しかも、生息している菌の種類も多様である。Mooreらの最近の報告によると、ヒトの歯肉溝からは325以上もの菌種が分離され、これらの菌種の多くはこれまでほとんど報告されていないものであるという。しかし、近年の嫌気性細菌の分離・培養および同定技術の進歩のおかげで、複雑な菌叢のなかから歯周病の原因菌としていくつかの嫌気性グラム陰性桿菌が注目されるようになってきた。

すなわち、若年性歯周炎の原因菌としては、*Haemophilus actinomycetemcomitans* が注目されている。一方、成人性歯周炎の原因菌としては、*Bacteroides gingivalis* や

Bacteroides intermedius などの黒色集落形成バクテロイデス属が重要視されている。これらのほかに、スピロヘータも歯周炎患者の病巣部で増加するといわれている。一方、歯肉炎は非特異的な細菌で惹起されると考えられている。若年性歯周炎の病原菌である *H. actinomycetemcomitans* は、以前には *Actinobacillus actinomycetemcomitans* とよばれていたが、1981年に Potts らによって改名が提唱された。しかし、現在も両方の菌種名が用いられており、統一には至っていない。この菌の諸性状は *Haemophilus aphrophilus* と非常に類似しているが、*H. actinomycetemcomitans* がカタラーゼ陽性であることなどから *H. aphrophilus* と鑑別される。

H. actinomycetemcomitans の病原因子としてユニークなのは、ヒトの多形核白血球と単球に毒性を示すロイコトキシンである。これは分子量 115,000 のタンパク質で、ヒトの多形核白血球を数分以内に失活する。このほか、同菌の産生するコラゲナーゼ、内毒素、骨吸収誘発毒素、線維芽細胞抑制因子、上皮細胞毒素などについて世界中で精力的な研究が続けられている。

成人性歯周炎の原因菌として注目されている *B. gingivalis* と *B. intermedius* は、いずれ

も血液平板上で黒色集落を形成する。前者は糖発酵能をもたないが、後者は糖発酵能をもつ。進行性の歯周炎では、*B. gingivalis* がとくに重要視されている。

B. gingivalis は、付着因子として分子量 43,000 のタンパク質からなる線毛をもつ。同菌は、トリプシン様プロテアーゼ、血漿プロテアーゼインヒビター分解酵素、フィブロネクチン分解酵素、IgA、IgG、IgM 分解酵素、コラゲナーゼなどさまざまなプロテアーゼを産生する。さらに、*B. gingivalis* は強い骨吸収活性をもつ内毒素を産生する。

これまで、歯周病の発病メカニズムの解明や予防治療法の開発のために、動物実験系の開発が強く望まれていた。今年度の Science 誌の新年号によると、Holt らは *B. gingivalis* をサル (*Macaca fascicularis*) の歯周ポケットに接種して、重症の歯周炎をおこすことに成功したそうである。

以上のように、長い間原因不明なままであった歯周病が、最近になりいくつかの特異的な細菌で惹起されることが明らかになり、わが国をはじめ世界中で活発な研究が開始されている。これらの研究は、いずれ歯周病の診断法や予防治療法の開発、ひいてはこの病気の撲滅につながるだろう。

関東支部の運営についての私見

日本細菌学雑誌42巻6号に本部の将来計画委員会から「各支部のあり方に関するアンケート結果」が報告されている。それを見て、関東支部がユニークな存在であることを初めて知った。学会に関しては、他支部では年1回で一般演題に力を入れ多数の出題がある。これに反し、関東支部は年2回開催し、シンポジウムが主体であり一般演題は非常に少ない。支部運営に関しても、他支部では評議員が多数で名誉会員制度があるが、関東支部では評議員が会員数に比して非常に少ないし、名誉会員制度はない。

いつごろから、どんな理由で関東支部のあり方がユニークなものになったかは知らない。手持ちの乏しい資料によると、支部学会の一般演題数は現在では20年前の半分である。一般演題

島村忠勝(昭和大・医・細菌)

数が減ってくると時間の穴うめとしてシンポジウムが増し現在の学会形式になったのかもしれない。また、支部評議員も20年前はほとんど研究機関部局の代表者によって構成されていたが、漸次、代表者は離れてきている。この二つの変化はなぜか15年前ごろからその兆候がみられている。そのころにはウイルス学、免疫学、などの関連領域の急速な発展により、研究者の各学会への分散、細菌学研究者の減少などの現象がみられた。関東支部のユニークな存在はむしろ他支部からの遅れを示しているのではないだろうか。会員の支部学会離れは明らかである。最近、細菌学の研究テーマも毒素、感染、分子遺伝に集中してきた感があり、支部学会のシンポジウムも日本細菌学会総会のそれと大同小異で

ある。シンポジウムも同じ、一般演題も少ないとなれば、支部学会から新しい研究情報を得る機会も減り、支部学会離れも当然考えられるものとなる。最近、小規模の研究会が盛んになったこともよく理解できる。

では、どうしたら支部学会を盛り上げることができるだろうか。それには会員の興味を引くことが第一であり、その興味は会員自身の研究テーマであろう。他支部に追従するわけではないが、支部学会は年一回（秋）で、シンポジウムは日本細菌学会総会にまかせ、一般演題のみにする。その演題も、たとえば、研究が行き詰ってしまい解決策を求めるようなものでもよいと思う。また、研究会の支援を積極的に行ったらどうだろうか。

支部学会の低調さと、評議員の選出方法、人数、名誉会員制度も無関係ではないように思われてならない。20年前までは支部は医系中心で15人の評議員で会員全体を代表できたかもしれ

ない。しかし、新設医大、他系の躍進により研究機関も増えており、一見民主的とみえる現状の選出方法では、小規模な機関の意見は果して反映されているでしょうか。たとえば、評議員は各研究機関部局の代表者になっていただくか、あるいは、本部評議員の支部選出人数ぐらいい選出し、その評議員から支部役員を選び、また本部に送る理事をも選出したらどうだろうか。そうすることによって支部の目的である「本部との緊密な連絡のもとに細菌学の進歩を促進する」ことができないだろうか。

名誉会員制度はぜひ発足させてほしい。たとえば、会員歴20年以上の現役を離れた65才以上の方ならだれでも名誉会員になっていただき支部学会を応援していただいたらどうだろうか。

支部評議員を二期つとめさせていただき、支部学会、支部運営を身近にみて日頃感じたことを、全く個人的な独断と偏見で意見を述べさせていただきますことをお願いしたい。

私からの提案

昭和60年関東支部評議員となってから早くも3年を迎え、そろそろバトンタッチする年になってきました。

皆様の御推挙により、評議員になってから木村支部長より、支部ニュース編集委員を委任され、山口編集委員長のもとで支部ニュースの発行の手伝いをしてまいりました。

関東支部ニュースは北里研究所の合田教授の発案により、発行され、我々が引き継いだものです。この支部ニュースは会員の皆様に読んでもらえなければ意味が無いと山口編集委員長や木村支部長の御努力により、内容の濃いニュースになっています。

支部ニュースは年2回とはいえ、発行するためには原稿を集めることが大変です。この点、山口委員長の御努力によって私どもは殆ど何もお手伝いせずまいりました。しかし、今回は原稿が少なく、急遽編集委員として穴埋めをすることになりました。

さて、引き受けてはみたものの、いざ原稿を書く段になると何を書いて良いか解らず、いた

高橋昌巳（聖マリアンナ医大・微生物）

ずらに日時が過ぎ締切の日が迫ってきました。

今後、引続いてこの支部ニュースを発行していくには何か基本的な原稿の入手を必要とします。

そこで私からの提案ですが

①関東地区の医学、歯・薬学、農・獣医学系大学、研究所および衛生試験所等の各所属機関の紹介を原稿用紙1～2枚程度、依頼しておけば年2回発行しても数年の原稿は確保できる。

②新任教授、研究所や衛生試験所の新任部長の紹介または挨拶などを掲載したらこれもまた、原稿入手の一手段となる。

③会員からの投稿の受付などです。

物事は提案者からといわれます。そこで私の所属する聖マリアンナ医科大学微生物学教室を簡単に紹介したいと思います。

昭和48年4月吉田教授と多摩川を渡って多摩丘陵の一角に建てられた聖マリアンナ医科大学に赴任しました。本学は神奈川県川崎市宮前区菅生に所在し、丘陵を削って建てられています。

そのため、道路からの坂を登っていきます。赴任した当時、バスは一時間に一回程度で将に田舎に来たなという感じでした。後で知ったことですが、この辺りは川崎のチベットといわれていたところだそうです。しかし、夏などは田圃からカエルの鳴き声が聞え、帰る電車の窓からは虫がよく飛び込んできました。この情景は今懐かしく、カエルの鳴いていた田圃は駐車場や家屋が建ち並び、テニスコートができ、僅か10数年前の面影は全くなくなりました。

微生物学教室は吉田教授によって開講された歴史のごく浅い教室です。開講当時のスタッフは吉田教授以下5名でしたが、現在は大学院生を含め10名、その外に研究生が数名おります。

主な研究は Serum-soft agar 法を用いた

Staphylococcus の莢膜血清型別あるいは細胞表面物質の感染と免疫機構の解析から出発して、Streptococcus, Klebsiella, Acinetobacter などに幅広く応用しています。もちろん Staphylococcus が教室の main theme です。そして、ブドウ球菌研究会の事務局にもなっています。

本学は神奈川県といっても最も東京に近い医科大学のせいか教職員の多くが都内に在住し、電車か車で通っています。冬の澄み切った空、多摩川を渡る電車の窓から見える白き富士の姿は、この殺伐とした社会に生きる我々の心を和ませてくれます。時間があつたら一度ゆっくりドンコウ電車で多摩川を渡ってみてください。

「カビ」の言語学的考察

山口 英 世 (東大・応微研)



「カビ」という言葉は極めて古い由緒来歴をもっており、今日でもそのまま日常語として広く使われている。それと同時に、「カビ」は厳密な意味での学術用語とはいい難いにもかかわらず、医学、理学、農学などこの微生物にかかわるあらゆる生物学の分野で繁用されていることはご存知の通りである。しかし、真菌学——医学領域ではこうよぶが他の領域では菌学という——においてはカビという言葉があらわす内容に多少の

混乱があるようであり、大きく分けて二通りの意味で使われている。一つは、菌糸とよばれる糸状の細胞体からできている真菌、つまり糸状菌の同義語としてであり、もう一つは、単細胞性真菌すなわち酵母をも含めて真菌全体をさす場合である。ふだんの生活のなかでカビが目につくとすれば、そのほとんどは糸状菌が発育した場合に限られるから、感覚的には第一番目の使い方がびったりするし、語源的にも正当性を

もっている。しかし、真菌学的に調べてみると、糸状菌といわれるものでも環境条件や生活環の時期によって酵母状に発育する例が少なくないことがわかる。したがって、真菌を糸状菌と酵母とに異論なく区別することは困難であり、真菌全体をひっくるめてカビとよぶこともあながち見当はずれではないという気がする。これから「カビのよもやまばなし」を執筆するにあたりこの広い意味でのカビについて話題を拾ってゆくことにする。

ついでにこの「カビ」に相当する外国語を幾つか拾ってみよう。英語の *mo(u)ld* は、現在「糸状菌」を意味する学術用語としても使用されている。フランス語の *moisissure*、スペイン語の *moho* も同じくラテン語の *mucor* から由来していると考えられる。しかし *mucor* が転用されて接合菌の1菌属である *Mucor* (ムコール属またはケカビ属と称される) の名が生れ、今日英語でいう *mucor* はケカビ類を総称する語となっている。アイヌ語の *kumi* が発音の上でカビに近いのはうなずけるとしても、日本からはるかかなたにある言葉ドイツ語の *kahm* やアラビア語の *kamir* とよく似ているのは単なる偶然であろうか。言語学に詳しい方がおられたら、ぜひご意見をうかがいたいものである。

一方、真菌に相当する英語 *fungus*、フランス語 *champignon*、ドイツ語 *Pilz* などは日本語の「菌」と同じように、いずれも本来キノコを意味する言葉である。キノコとは、一部のカビがその生活環のなかの特定の時期に大きな子実体すなわち繁殖のための器官をつくった場合にとくに目立つためにそういう特別の名でよばれるようになったわけである。したがってどんなキノコも子実体をつくらない時期にはただのカビとしかみえない。5万種とも10万種ともいわれるカビのごく一部の菌種のしかも特定の時期の発育形態をさすキノコをもって真菌全体を代表する名称としたのは今日の真菌学者の立場からはいささか理不尽なという気がしないでもない。しかし、古い時代からその大きくて(肉眼でもよくみえる)特徴のある形はいやでも人眼をひいただろうし、芳香美味な自然の食品として珍重されたに違いない。そうした理由によるのであろうかキノコは何千年もの昔から植物の

一種とみなされて研究の対象となってきたのである。約250年前にカビを系統的に研究する学問として真菌学(菌学) *mycology* が興った時、キノコにちなんでそう名づけられたのはむしろ当然の成りゆきというべきであろう。*Myco-*は、*myc-*、*myceto-* などと同じく、今日真菌を意味する接頭語として使われているが、もともとはキノコを意味するギリシャ語 *mykēs* に由来する。古代ギリシャの伝説は語っている。プロエトス王国を継承した英雄ペルセウスは、ある時キノコにおかれた露で渴きを癒やすことができた。以来この地を都と定め、キノコにちなんで *Mycanae* (ミケネ) と名づけたという。このミケネこそホメロスの詩に「黄金に富むミケネ」と謳われ、紀元前1,600~1,000年代にギリシャペロポネソス半島にかのミケネ文化が絢爛と花開いた地である。

大分横道に逸れてしまったようである。話しをカビに戻し、まずその語源を探ってみることにしよう。「黴」というこの難しい漢字は、遅くとも2,000年前にはつくられていたという証拠がある。それというのは、後漢の和帝の時代に編纂された中国最古の字書として知られる「説文解字」のなかに黴に関する一節がある。いわく「黴、中久雨青黒也、从黒微省聲。」物が長く雨にあたって青黒くなったのが黴であり、この字は「黒」という字と小さくて見にくいという意味の「微」という字の省略形である「微」がが組み合わされてできたと解説している。つまり、湿気が多くなると生じてくる黒くて小さなものという意味をあらわしているわけで、今日の私達からみてもカビの実体をよく把んだうまい字の造り方だと感心させられる。

議 事 録

・第7回評議員会

日時：昭和62年10月15日(木) 12:00~13:00

場所：野口英世記念会館

議題：

1. 会務総会の件

会員の現況は正会員1,490名、学生会員48名、合計1,538名である。昭和62年度会計監査報告書は会務総会で工藤会計監査委員より

報告され、承認された。

2. 第59回支部総会準備状況（黒坂総会長）

開催日：昭和63年6月4日（土）10：00～17：00，場所：東京慈恵会医科大中央講堂，総会の詳細については日・細・誌，第43巻第1号に掲載予定。

3. 第60回支部総会準備状況（秋山総会長）

開催日：昭和63年11月15日（火），16日（水）。場所：神奈川県立県民ホール。第1日目：一般演題，第2日目：シンポジウム1題，特別講演1題，会長講演1題の予定。細菌学会非会員は一般会員同様に参加費を払うことにより学会参加が了承された。

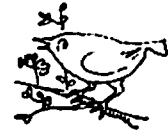
・第8回評議員会

日時：昭和63年1月22日（金）16：00～18：00

場所：帝京大学病院本館2階第二会議室

議題：

1. 第59回支部総会準備状況（黒坂総会長）
2. 第60回支部総会準備状況（秋山総会長）
3. 第61回および第62回支部総会会長選出の件
第61回総会長に河西信彦昭和大学薬学部教授，第62回総会長に橋本一群馬大学医学部教授が選出され，支部長の交渉の結果いずれも受諾された。
4. 選挙管理委員選出の件
全評議員の推薦により，光岡知足（委員長），新井俊彦，工藤泰雄，中村明子，山口英世各評議員が選出された。



◇編集後記◇

△…例年になく気温の変動の激しかった冬がようやく過ぎ，第7号の編集もほぼ仕上って一息ついた矢先に，光岡知足先生が学士院賞を受賞されたという朗報が入ってきました。めったにないお目出たいビッグニュースということで支部長にご相談し，早速お祝いの記事をつくりました。

△…本号巻頭の黒坂総会長のご挨拶にもありますように，来る6月4日に開催される次回の支部総会のプログラムに「腸内常在菌の功罪」と題する光岡先生の特別講演が組まれております。はからずも先生の受賞記念ともいうべきタイミングのよい企画となりました。

△…支部総会以外の記事も毎号ご好評を頂いておりますが，今回は古賀（予研），島村（昭和），高橋（聖マリ医大）の諸先生よりご寄稿を頂きました。古賀先生は，近年著しい発展を遂げている歯周病の細菌学的研究の成果をおまとめ下さいました。また，支部評議員でもある島村先生と高橋先生からは，ご自身の体験に基づいて支部運営や支部ニュース編集についてご提言を頂きました。お忙しい中をご執筆下さった各先生に厚く御礼申し上げます。なお，島村先

生はこの度昭和大学教授に栄転されました。お祝いを申し上げますとともに一層のご活躍をお祈りいたします。

△…小生の拙文は，数年前バイエル薬品（株）の依頼で「かびのよもやま話」と題するシリーズ用に書き下したものの一部です。偶々これを眼にされた会員の先生のお契めがあったので，同社のおゆるしを得て転載させて頂きました。

(H/Y)

日本細菌学会
関東支部ニュース

第7号
(1988.4.1)

編集・発行：日本細菌学会関東支部
〒173 東京都板橋区加賀2-11-1
帝京大学医学部細菌学教室
☎ 03-964-1211